

Wennerlind, Carl and Margaret Schabas, eds.:

*David Hume's Political Economy*

London: Routledge, 2008, xiii + 378 pp.

本書は経済学史家ウェナリンドとシェイバスを編者とする、ヒューム経済思想についての論文集である。執筆者にはクリストファー・ベリーをはじめ、スコットランド啓蒙思想家のパトロンの歴史的研究で知られるロジャー・エマソン、『アダム・スミス伝』のイアン・ロス、浩瀚な『ジェラシー・オブ・トレイド』を近年出版したイシュトヴァン・ホントなどが名を連ねている。加えて、(略歴から推察するに)比較的若手による論文も掲載されており、今後もさらなる発展が予想される主題ならではの内容となっている。そもそも本書は、序章にもあるとおり2003年に開かれたワークショップで発表された原稿を基にしている。このワークショップは、報告希望者が応募時に原稿を提出して審査を受け、厳選された報告者だけが相互に意見交換をするという、通常の学会報告よりも限定されたものであった。その中からさらに厳選されたものが、本書に掲載されている諸論文である(1論文だけは例外)。こうした経緯を見ても、本書が現時点での英語圏におけるヒューム経済思想史研究として、かなり高水準であることが分かる。ヒュームの経済思想と言っても、各論者の切り口は多様である。すべての論文に触れることはできないが、代表的なものを紹介することで書評の責を果たしたい。

まずベリーは、自己抑制の結果としての貧困というストア的・キリスト教的図式を、ヒュームが奢侈論を通じていかに組み替えたかを論証している。ヒュームにとって、貧しさとは生活にとって本質的なものの欠如であり、それまで「余分なもの」と考えられていたものこそが洗練の、ひいては人間らしい生活の本質なのであ

る。この議論は、ある意味ではベリーの著書『奢侈の観念』を下敷きにしている。だが今回の論文では、力点を「豊かさ」ではなく「貧しさ」に置くことで、ヒュームが「貧しさ」を中心に据えてきたヨーロッパ的な価値意識にどのような転換を起こしたかを示すことにより、ヒュームの奢侈論の意義を新たな視角から浮かび上がらせている。

また、ロックやバークリーの貨幣論について著作を出版しているカフエンティスは、ヒューム哲学にある自然なフィクションと人為的なフィクションという区分を析出し、そこから鑄造貨幣と紙券とに対するヒュームの態度の違いを分析している。ヒュームにとって、貨幣はすべて歴史的に形成された制度であり、ある種のフィクションである。だが、それらがどれほど人々の間で確立した安定的なフィクションかという視点こそ、ヒュームが紙券に批判的な理由を解き明かす鍵だとカフエンティスは解釈する。

カフエンティスの論文との関連で重要なのは、ヒュームが残した文書についてのダイヤモンドによる紹介と考察である。カナダは1763年にフランス領からイギリス領になり、それまでに発行された紙券の処理が問題となっていたのだが、パリに渡っていたヒュームが代理公使としての立場で、この件についてイギリスがとるべき対応を論じた文書が残っていた。「残っていた」と言っても、著者が「ポーの「盗まれた手紙」のように、はっきり見えるところに長らく隠されていた」(169頁)と述べているように、この資料はすでにグレッグが1932年に編集・出版した『ヒューム書簡集』に収録されていた。だが、その経済思想史上の意義が明確

に意識されたのは、今回がほぼ初めてと言える（本論文には、この文書も再録されている）。ヒュームの紙券信用に対する見解は、このように公人としての実体験と密接に結びついていたのである。

シャルル、ショヴリン、ホントらは、それぞれヒュームの『政治論集』がヨーロッパ大陸、とくにフランスの経済思想（とくに奢侈論争）の文脈に与えた影響を詳しく論じている。中でもホントは、いつものように詳細な文献探査により（また、他の論者とは比較にならないほど長大な論文により）富国-貧国論争と奢侈論争とを結び付けている。富国-貧国論争を新たな角度から論じているという点では、このホントの論文は『ジェラシー・オブ・トレイド』の補遺としての性格も持っている。

ホントによれば、17 世紀から 18 世紀にかけて、すでにアイルランドとイングランドとの間で富国-貧国論争の原型が展開されており、ヒュームとタッカーとの論争はそれを継承している。また、1801 年のアイルランド併合時には、ヒュームやスミスの議論が今度はイングランド-アイルランド間の論争へと逆輸入されるという経緯があった。この間に、分業や機械の導入によって富国の優位を維持する理論的可能性が 18 世紀後半を通じて追及されていく（ヒュームにはこの視点が欠けていたとホントは考えている）。これと並行して、ヒューム『政治論集』は、一方で奢侈を擁護し、他方で積極的な金融政策を批判するという両義的立場のため、フランスではグルネを中心としたグループから後者が批判（前者が評価）され、ミラボーからは前者が批判（後者が評価）されるという複雑な位置づけを与えられた。ホントの論文は以上 2 つの文脈を時系列に追い、イングランド-アイルランド間の論争から合邦後のスコットランド、そしてフランスでの奢侈論争をはさみ、ふたたびヒュームの死後アイルランド併合期へと議論が進んでいく。以上のように、ホントは、政治

経済学の理論的發展を、商業的覇権を中心とする新たな国際関係の出現という歴史的文脈の中に位置づけようとしている。

編者であるウェナリンドの論文は、これまでに彼が発表した諸論文の主張を敷衍しており、ヒュームが近代社会を支える重要なコンヴェンションの 1 つとして貨幣をとらえていた点を明確にしている。また同じく編者のシェイバスは、ヒュームが制度としての貨幣が持つ不安定性と、貨幣の自律性との両面をとらえていたことを指摘する。両者とも貨幣論にかなりのウェイトを置いているという点で、ヒュームの経済理論を包括する経済哲学ともいえる視角からの分析についてはやや物足りなさを感じるが、「貨幣数量説のヒューム」という古典的イメージを再検討すべき起点として設定する方が理論的貢献を明確に打ち出しやすいという事情があるのだろう。とはいえ、ヒュームという多面的な思想家の経済思想を評価する基準についてウェナリンドが述べた次の言葉には、評者も強く同意する。「18 世紀の貨幣論に対するヒュームの永続的な貢献を私たちが考える際、彼が本当に正貨流入メカニズムや貨幣数量説を本当に考案したのかどうかといった特定の考えの新しさ——あるいはその欠如——に焦点を合わせるべきではない（略）。むしろ彼がより広範な社会的・政治的文脈に埋め込まれた社会関係として貨幣を理論化したことに、幅広い焦点を当てるべきである」（123 頁）。

本書の登場により、とくにフランスにおけるヒュームの受容についてはある程度の見取り図が示されたと言える。だが、ヒュームの経済思想と、それ以外の分野のヒュームの著作との関係や、スミスをふくむ他のスコットランド啓蒙思想家との経済思想上の考え方の違いなど、興味深いテーマは多数、残されている。本書は今後、そうした未開拓の分野への優れたスプリングボードともなるだろう。

（壽里 竜：関西大学）